

●パネルディスカッション

パネリスト 葛谷 誠 氏（西小学校区まちづくり協議会）
中村 利男 氏（元・自治 KEN、南小学校区自治会連合会会長）
川嶋 知子 氏（ながくて幸せ実感広め隊）
西畠 綾花 氏（DoNabenet in あいち）
小林 慶太郎 氏（四日市大学副学長）
コーディネーター 大庭 卓也 氏（元・自治 KEN）

○大庭：ただ今、司会者からご紹介いただきました、大庭と申します。どうぞよろしくお願いたします。

今回のシンポジウムは、市民の手づくりということで、コンサルの台本があるわけでもなく、市民がここのコーディネーターを務めるのは非常に異例なことでありますが、この条例ができた実態を表すという意味で、こういう手づくりのシンポジウムを開催するわけです。



私もこういう場に慣れているわけではございませんので、パネリストの皆さんのご協力をいただきながら、会場の皆さんに伝わる言葉と内容で活発な議論になる予感もありますので、どうぞよろしくお願いたします。

パネリストの皆さまには、時間が限られておりますので、発言はコンパクトにお願いいたします。小林先生には、適宜その都度アドバイス、コメント等をいただければと思っております。

最初に、パネリストの皆さんの自己紹介を兼ねまして、現在、関わっていらっしゃるまちづくりの活動内容につきまして、簡単にご紹介をさせていただきますでしょうか。

○葛谷：よろしくお願いたします。私は西小学校区まちづくり協議会をしております葛谷と申します。

私たちの小学校区まちづくり協議会は、今年で2年目になりました。合言葉は、「ふれ

あい つながり みんなで楽しむまちづくり」です。

市民の皆さんで話し合いをしているのですけれども、そのテーマとして、自治会のこと、子どもの育成、生きがい、安全、防災、それから、私たちが拠点としています西小学校区地域共生ステーションのことについて、話し合っています。

私はまちの相談員ということで、それぞれの団体のご相談だとか、そういったものをつないだり、あとは市民の皆さんのご相談に乗って、私が解決するわけではなくて、社会福祉協議会さんだとか、市とかいろいろなところにつないで、皆さんで解決しようということで取り組んでおります。よろしくお願いします。

○中村：私は、自治 KEN の所長と、南小校区自治会連合会の会長をしていますので、連合会で地域のためにどのような取り組みをしているかを紹介しながら、地域の報告をさせていただきたいと思います。

南小では、六つのことに取り組んでいます。一つは、犯罪も多いということで、防犯カメラの設置事業をしています。それから、先ほどもあったように、スクールガードの見守りも行っております。防犯パトロールも行っております。一斉防災訓練も継続して行っています。皆さんの楽しみの校区運動会、子ども中心の夏祭りも行っています。

この取り組みにはテーマがありまして、南小は「つなごう きずな きずこう コミュニティ」を合言葉に、住みやすい、安心安全なまちづくりを目指して、今活動しているところであります。

○川畷：幸せ実感広め隊の川畷です。よろしくお願いします。

市内で活動されている団体の方や、個人の方取材してまとめ、市のホームページに載せて、他の市民の方へ情報を提供しております。

前向きな活動をされている市民のことを知って伝えることにより、周りの人々が感化され、みんなが幸せになるまちづくりに生かしたいと考えております。

みんなが幸せになるまちにするための指標もつくりました。本日配布されております、このピンクのパンフレットにも掲げているのですが、それは子どもの笑顔を育てるまちです。

その指標をかなえるための市民の生活目標も考えてみました。例えば日頃から笑顔で生活ができていると感じているとか、日頃から近所の人にあいさつをする、される習慣があ

るといったもので、決して難しいことではないと思います。一つでもその小さな目標に向かって生活していれば、身近な子どもの笑顔をつくることができると思います。

将来を担う子どもが居心地の良いまちであれば、みんなが幸せと感じるのではないのでしょうか。そんなまちになるように、微力ながらお手伝いさせていただいております。

○西島：「DoNabenet in あいち」から来ました、西島綾花といいます。今日はよろしくお願いたします。

私は、食事を通して、地域の方と顔の見える環境をつくることを目的に活動しています。具体的には、西小学校区地域共生ステーションで、3カ月に1度お食事会を開かせていただいて、お食事会のテーマとかメニューとか、当日のタイムスケジュールなどを企画し、当日の運営も、広報活動も、自分たちで地域の方のお力も借りながら行っています。

今月の7日、七夕の日にもお食事会をさせていただきまして、夏バテ予防のメニューということで、七夕のちらしずしとか、豚しゃぶ、きゅうり巻きなど、いろいろなメニューをつくりました。それ以外にも、小学校の夏祭りとか、運動会、子ども食堂などにボランティアとして参加したり、シルバー人材センターさんと、さつま芋の植え付けとか、芋掘りのお手伝いもさせていただきました。食事ではなくて、お酒を通してつながりをつくるという、お酒ネットという活動もさせていただいたり、防災訓練にも参加させていただいています。

今は、愛知県立大学、愛知淑徳大学、愛知学院大学の学生が所属しておりまして、総勢40名で、外国語学部や社会福祉学科など、いろいろな学部の学生が参加していて、いつもにぎやかに活動しています。よろしくお願いたします。

○大庭：ありがとうございました。今、皆さんが現在関わっていらっしゃるまちづくりについて、それぞれご紹介をいただきました。ひょっとしたら会場の皆さんも、すごくたくさんやっているじゃないかとびっくりされたかと思いますけれど、私が一番びっくりしています。

それぞれの活動は、多岐にわたっていると思いますけれども、その活動の中で悩み、解決しなければならない課題、もっとこうしたいなということがあると思うのです。その辺を教えていただきたいと思いますが、葛谷さん、どんなものでしょうか。

○葛谷：私は西小学校区の代表として来たつもりで、今日ここにいるのですけれども、皆さんの地区でも、同じような悩みがあると思います。既存の会、自治会も含めて、防災会だとか、シニアクラブさんだとか、いろいろあると思うのですけれど、そういったところの代表者さんになられる方がいないとか、その会自体の存続ができないという声が多数寄せられています。



西小学校区でも、そういった問題を解決するためにいろいろお話し合いはしているのですけれども、ここが皆さんのまず解決しないといけないところなのかなと思っています。

私個人としては、古くていいところは残しつつ、新しいコミュニティに転換している転換期になっているのではないかと思うので、皆さんが知恵を出し合って、新しいコミュニティは何かというところで、まちづくり協議会が動いているという認識です。

○大庭：この件に関しての議論は、また後に続けるとします。問題点、課題点について、川島さんはいかがでしょうか。

○川島：広め隊の活動自体は、月に1回のゆっくりしたペースで集まって、お茶菓子を前に情報交換や取材先を決めたり、取材をしたりと、楽しい時間にはなっているのですけれども、メンバーたちの人脈の限度がありまして、取材先の発掘に限界を感じております。

取材者をもっとスムーズに広げていくことができ、自然につながっていけると良いのですが、私自身も人付き合いが得意なわけではないので、次の取材先を決めるのにとっても悩むことがあります。やっぱり市民同士のネットワークの大切さを感じております。

○大庭：ありがとうございました。

元に戻りますけれども、葛谷さんは、代表者になる人がいない、自治会とかいろいろなまちづくりをしていく集まりの中で、やっていく人を見つけることすら難しいということですが、そういう人たちが出てきても、代表者になる人はもっと見つけるのが難しいというようなことがあると思いますけれども、中村さんは自治会、連合会をおやりになっていて、どのような感想をお持ちでしょうか。

○中村：参考にはならないかもしれませんが、私たちは、地域でどのようなかたちで助け合って、顔見知りのある関係づくりをしようかということで、いろいろ話をして決めてきたことがあります。

それは、防災訓練を始めるにあたり、地域みんながなるべく参加して、地域がまとまるものは何かということをお話したのです。自治会は加入者が2000世帯くらいありますが、安否確認のための黄色いタオルを、1軒1軒配っていただいて、それを地域のつながりにしていこうということを始めました。その事業を今、継続してやっております。

そのことが、地域の話し合い、顔の見える関係、共助、お互いに助け合うということを生み出すのではないかと考えています。

防災訓練をやることによって、地域がお互いに助け合う土壌づくりができるのではないかと話した結果、そのようなかたちで現在取り組んでいるところです。

○大庭：分かりました。小林先生、代表者というのは矢面に立つ人ですから、組織ができたとしてもその矢面に立つ人、利害を調節する人はとても大変ですし、損な役回りといえますか、下手したら恨まれるのではないかというようなことにもなりかねません。

先生自身も、先頭に立ってやっていらっしゃる立場からして、組織の頭をどうやってつくったらいいのでしょうか。

○小林：絶対的にこれが正しいという答えは難しいと思います。今、大庭さんから、「おまえも、頭で大変だろう」とおっしゃっていただいたのですが、当初は大変だったのですが、今は僕はすごく楽をさせてもらっています。

最初に組織を始めたときは、私が声を掛けてみんなでやっといこうよと言っていたのですが、私もだんだん忙しくなってきた、プツンときて、「もう辞めてやる。こんな組織は要らん。やりたければ、おまえらが勝手にやってくれ。俺はひくわ」と言ったのです。

そうしたら、「今ここでこの組織を解散したら、今までやってきたのがもったいないじゃん」とみんなが言い始めて、「存続したいわけ？ みんな」と言ったら、「いや、したいよ」と。「でも、俺はもう無理だよ」と。

それで、「じゃあ、分かった。対外的なあれもあるから、名前だけ代表でいてくれ。やることは俺たちが全部サポートするから、みこしに乗ってくれ」と周りの人が言ってくれました。それからすごく楽になりました。

だから、1人の人に押し付けて、その人に全部やってもらうというかたちで、代表なり組織のトップがいるとだんだん疲れてきてしまうと思うのですけれど、そうやって「じゃあいいよ。もう辞める」と言って、組織も「こんなの解散してしまえば」と言ったときに、「いやいや、この組織が今無くなったら困るよね」と言う人が必ず出てきます。実質のトップは誰かというのは置いておいて、実際に動いてくれる人、必要性を感じて「そこまで言われるのだったら俺が一肌脱がないといかん」と言う人が出てくると思うので、本当にその組織が必要かどうかということから、まず1回考えてみるのもありかもしれないと思います。

要らないのだったら、1回辞めちゃって、別の組織をつくったらいいじゃないですか。

○大庭：なるほど。西畠さんにお伺いしたいのですけれども、先ほど川瀧さんが、ネットワークがあっても、取材先がだんだん手詰まりになってくるということでした。人と付き合うことがあまり得意ではない方も、たくさんいらっしゃると思うのです。

そういう方も、まちづくりに参加していただきたい。そういう中で、学生さんたちをたくさん束ねておられる西畠さんとしては、ネットワークづくり、仲間をどのようにしてオーガナイズしていくのか、あるいは引っ張り込んでくるのか、まとめ上げていくのですか。どういうスタンスでおやりになっていらっしゃるのですか。

○西畠：学生という限定での仲間づくりだったら、今年は私たちの団体に、1年生が20名入ってくれました。2、3年生も今の時期に、今更なのですけれどもということで入ってくれました。

どうして入ったのと聞いたら、「楽しそうに活動していたから」とか、「活動が楽しそうだなと思ったから」ということで入ってもらえました。自分たちが楽しんでいるということの情報も、発信していくことだと私は思っています。

ただ、地域の方も含めた仲間になると、食事会の参加者の方は限られてきます。外に出られない方は、参加していただけないということを私たちもずっと悩んでいて、もっと力があって地域に顔が広い方に頼っています。例えば社協の方とか、市役所の方にお力を貸していただいて、地域の方の活動場所に私たちが入っていきます。例えばサロン活動だったり、夏祭り、運動会に行って、まずは私たちの顔を覚えていただきます。

力を借りながら、自分たちで、できるだけつながりをつくっていくというふうに工夫し

てきたつもりです。

○大庭：なるほど。葛谷さん、この条例でも、まちづくりの単位として、まちづくり協議会というものが言われていて、六つの小学校区の中で、できたところや、今つくっている最中のところや、全く未着手のところなど、いろいろあります。

まちづくり協議会の守備範囲はものすごく広くて、得意である人や得意でない人、あるいは、関心のある人や関心のない人、この分野だけは関心はあるけれど後は関わりたくない人、いろいろな方がいると思います。

そういう中で、まちづくり協議会に関心を持っていただく、あるいは、まちづくり協議会を通してのまちづくり、まちづくりを通してのまちづくり協議会をどうやって人に発信していくのか。あるいは、仲間にしていくのか。その辺の苦労は、どんなものでしょうか。

○葛谷：特に広報においては、今だと、広報誌とか、地域の掲示板に貼らせてもらったりしています。

私が思うのは、必ずその会議に出席しないといけないとか、どこかに所属していないと駄目ではなくて、お一人お一人が、住んでいるところで少しまちのことを考えて、こうだなと思ったことで行動してもらったらいと思います。それを、まちづくり協議会に参加している方とか、組織を代表している方たちが温かい目を見て、それも含めてまちづくりだよというふうに意識を変える。そこからまちづくりが始まるのではないかと思います。

必ずどこかに所属するという縛りを無くして、そこがどうやりとりしていくかという仕組み、その構築をこれから考えていかなければいけないのではないかと思います。

○大庭：なるほど。中村さんに伺いたいのですが、中村さんは、長いこと時間をかけてまちづくりをされてきているわけですがけれども、先ほどおっしゃった黄色いタオルのことに賛成している人たち、今のマンション族、歴史の浅い新しく引っ越してきた人たちなど、住民の中には温度差もあれば、住民になった時間の長さ、深さ、地縁、血縁の濃さもばらばらな中で、やっていることをどうやって理解していただけたらいいのでしょうか。

僕は、黄色いタオル運動を前にもお聞きして、とてもいいことで、ぜひ広めればいけないか、誰が聞いてもいいことだと思うだろうと思っていたくらいですが、そういうことに対して、「俺はそんなことをやりたくはないんだ」とか、理不尽な抵抗みたいなものに遭

うことはあります。

○中村：それは、先生も言われたようにあると思います。

私たちも、やれるところからということでスタートしましたので、自治会の役員さん、自治会長さんと話し合いを持ちながら、やって来たところですよ。嫌々やるということではなくて、やれる人から、やれるところからということです。

今の黄色いタオルを始めたのは、安否確認をして、地域のつながりがよりできるということと、組長さん以下全ての人が、地域の方に黄色いタオルを配って、「これは防災訓練のときに必ず門扉に掛けてください。それで安全確認をします」といちいち言うことができるからです。

そのために会議もたくさんやりましたが、今言われたような「私がこんなことをやらなくていいではないか」という意見も出たりしました。でも、やってみようということで、今年で3年目になりますが、だんだん安否確認の黄色いタオルを掛ける率も増えてきましたし、それを通じて防災訓練に参加する方も増えてきました。そういう中で、地域はつながっていくのかなと思います。

うちのキャッチフレーズを何遍も言いますが、「つなごう きずな」です。コミュニティも大事にしていますので、「きずごう コミュニティ」を合言葉に、少しずつ楽しい南小校区のまちづくりのために、役員一同やっていければいいのかなと、今は考えております。

○大庭：ありがとうございました。ずっと長いことやってこられて、理解が深まりつつあるのかな、輪が広がりつつあるのかな、まちづくりに対して理解が広がりつつあるのかなという実感はお持ちでしょうか。

○中村：持っていると思います。地域で、少しずつでも、地域に何らかのかたちで自治会連合会、自治会の皆さんが参加しているという位置付けをするためのタオルだったというのもあります。防犯のほうでは、防犯カメラを設置したときに、アンケートも取りましたし、それに基づいて防犯カメラを設置した後に、地域で防犯カメラ作動中というステッカーも全戸に配布しました。それも、地域の皆さん1軒1軒に配ってあるものですから、



それでよりつながりがあるのかなと実感として感じています。

○大庭：分かりました。ありがとうございます。

皆さんそれぞれのご苦労を抱えて、まちづくりにそれぞれのスタンスで取り組まれているわけですが、先ほどから話が何回か出ておりますけれど、ここで小林先生に再度お聞かせいただきたいなと思います。

先生の先ほどの話の中でも、やれる人、やりたい人からやれることをというようなスローガンがレジュメの中にあっただと思います。まちづくりに携わる人たち、あるいは自分がやろうとしたこと、あるいは既存としてある組織の仲間を増やそう、シンパシーを感じる人を増やしていこうとしても、嫌がる人だっているわけです。「俺はそんなことはやりたくないよ」「あんたらがやってよ」「俺は、邪魔はしないけれど、応援もしないぞ」というスタンスの人もいると思うのですが、そういう人たちを、首に縄を付けて引っ張って連れて来るわけにはいかないと思います。

着実にまちづくりをしていくために、どうやって仲間づくりをしていったらいいのか、重なる部分があってもいいのですけれども、教えていただけませんか。

○小林：一定数の人が協力してくれないというのは、やむを得ないところもあると思います。それこそ生活スタイルもいろいろあって、みんなが昼間になにかやろうというときに、昼間寝ていなかったら仕事に差し障る人も中にはいらっしゃるでしょう。

全員に首縄を付けて連れて来るというのは、どだい無理だと思うのです。ただ、その中で、いつも同じ人しか来ない、限られているというのは、皆さん共通の悩みだと思うのですが、なかなか輪が広げられないです。

ではどうすればいいのだろうかということなのですが、ある程度活動が活発になると、「あの人たちがやっているようね」というのが周りの人に知れてくると、かえって入りにくいというのは意外とあると思うのです。20、30人で仲良くやっているところに、自分がひょっこり一人で行ってというのは、気後れする。それはさすがに怖いなど、皆さんも思いませんか。そういうのがあると思うのです。

ゼロか1かみたいなかたちで、いきなり入ってこいというのは、なかなかハードルが高いので、そういうのは諦めて、周辺的な活動です。例えば拡大バージョンで、「いつもと違うかたちでこういうことをやるので、普段来ていない人もウエルカムなのだけれど、一緒

にやってみない？」とかです。



あるいは、まちづくり協議会はいろいろな活動をしていますから、「このことについてだけ参加してくれればいいんだけど、取りあえず防災訓練だけは来てもらえない？」とか。「それだけでいいのだったら行くわ」と言う方はいらっしゃると思うので、できるだけハードルを下げて、どこかの部分でも絡んでもらえたら、しめたものです。1回絡んでもらったら、その人に、「また今度こんなことやるから来てよ」と、連絡が取りやすくなりますよね。

お互い顔を知っている人が1人でも2人でも中に出てくると、「あの人がいるのだったら行ってみようかな」と、行きやすくなるじゃないですか。そういうきっかけをつくることは大事かなと思います。

あともう1点だけいいですか。これも先ほども申し上げたことで、かぶってしまうのですが、刈谷市の小垣江の話をしました。得意な人に得意なことをさせる仕掛けは有効だと思います。拒みにくいじゃないですか。「奥さん、元看護師だったのでしょうか。災害のときだけでいいから、けがしている人の面倒くらい見てよ」と言われたら、「私が看護師だということまでバレているのに、拒むのはなかなか難しいわ」となりますよね。そういう人は、「そのときだけよ」と言ってたぶん協力してくれます。

この人はこれが得意だ、これがツボだというところをブスブスと刺していくと、逃げられなくなって、「分かりました。それだけはやります」と入ってきてくれて、だんだん絡みが濃くなっていけば、仲間になっていくのかなと思います。

いきなり全部参加ではなくて、部分部分からちょっとずつ入ってきやすいように、なだらかな参加の仕方を用意しておく。裾野を広げておくといいのじゃないかなと思います。

○大庭：今、先生のお話で非常に示唆的だったのは、周辺的な活動、あるいは、「それだけでいいから来てほしい」と誘い込む、活動のハードルを下げることです。

得意な分野を攻撃すると言いますか、そこだけでいいからと。災害なんて毎日あるわけではないのですから、そのときに何かやってくださいというお願いをします。それで、何もやっていないのだけれど、その人に、まちづくりに関わっているというマインドが形成されたら、非常にいいことだと思います。

西島さんにお伺いしたいのですが、先生が一連の今おっしゃった中で、仲良しのバリアーというか、一つの塊だけがグループをつくってしまって、周りで見ている人が入りづらいということでした。大学生は大人とは違うと思いますが、遠くで見ている、あの仲間はいいけれど、ちょっと入りづらいなということは、日々の活動の中で感じることはありませんか。

○西島：あります。私たちはもともと、社会福祉学科の学生の参加がほとんどです。ほかの学科の学生が、DoNabenetさんは社福のサークルだから、ほかの学部は駄目なのではないかという風潮が広がっています。

社会福祉の子ばかりが集まってくるサークルだったり、参加者の方にも一度、私たちはメールをさせていただいていますが、「DoNabenetさんはコミュニティができてるので一人では行きづらい状況です」というメールも実際にいただいていますので、それは本当に痛感しています。



○大庭：それを打ち破るための工夫とか、幹部の方々、役員の方々と話されていることはありますか。

○西島：学生に対しては、今年は学部に関係なく入ってもらえたのですが、勧誘の段階で、最初に私たちは地域福祉というのを主張していたのですが、それだと福祉学科だけになってしまうから、いろいろな学科が入っていいし、地域の人と楽しくご飯を食べて、おしゃべりしているサークルだよと言っています。みんなは、それだったらということで、外国語学部の子とかも入っています。

私たちは西小校区共生ステーションで活動させていただいているのですが、今は地域の方のことを話し合っている段階です。4年生の先輩方からもお話をいただいています。行き慣れていない方にとっては、自分の場所やテリトリーではないので、来づらいのです。なので、私たちからその方たちのテリトリーに少しずつ入って行くのはどうだという話をして、例えば長久手市内のカフェをできればお借りして活動したり、ちょっと難しいとは

思うのですが、皆さんも髪は絶対切られると思うので、美容室とか理容室に行って活動してみるのはどうだろうという話をしています。

○大庭：なるほど。お偉いと思いました。そうやって学生さんの中でも、自己の改革をしているというのは、見習わなければならない立派な活動だと思いました。

川寫さん、先生、あるいは横で西島さんがおっしゃったことから、最初におっしゃったご自分の活動の中でのやりづらい点、悩み、ネットワークの広がりのおっしゃいましたけれど、それならこんなことが当たるのかな、あるいはさらなる問題が見つかったでもいいのですが、何か気付きの点はございますか。

○川寫：まず、年齢的に、新しい居場所に向かって新しい仲間をつくるような雰囲気の間ではないので、ちょっと大変かなと思いました。

本当にゆったりとした雰囲気の活動なので、あまり活発にしても、自分たちが大変で、ボランティアというイメージなので、今の状態でもいいのかと思いつながっていかねばならないのですけれども、本当にどうしようというところでさまよっている状態です。環境が違うので、なかなか結果が出ない感じです。

○大庭：なるほど。中村さん、今、川寫さんおっしゃいましたけれど、ボランティアというお金にならないようなところに、世のため人のために自ら身を投じる、時間を投じる活動では、まちづくりをやらなければならないという義務感と、まちづくりは楽しいよねと思うところは、非常に大事な分岐点だと思うのです。

中村さんは、長いまちづくりの中で、どんな感じでおやりになってきたのでしょうか。

○中村：言おうとしたことなのですけど、やっていて楽しいという活動をしないと、継続できないと思っています。

私も退職して、初めはうろろしていたのですが、自治会に関わって、長久手のまち、南小のまちで何か活動しようかなと思ってやったのですが、大庭さんが言われたように、嫌々やっていたら活動は前進しないし、自分たちの意見も反映しないだろうということで、自治会のメンバーも結構お年寄りなのですが、1週間に1回くらい会って、南小のまちについていろいろ話しています。

先ほど先生が言われていたように、いろいろな角度から話が出てくるものですから、そういう中で黄色タオルも出ましたし、見守りのための防犯パトロールのためのカメラの設置の話も、いろいろ出たということです。

だけど一番言えることは、嫌々活動するのではなくて、活動していることが楽しい。楽しいということは継続できるということで、私がやっている以上は、楽しくみんなと話し合いながら、嫌な関係もありますが、そういうことは無くして、自分の意見も言い、相手の意見も尊重し、お互いに話を聞き合う土壌を、南小ではつくって、より地域のために頑張っていきたいということです。

そういう気持ちがあれば続くのかなというのが、今の私の到達点だと思います。

○大庭：世代間の交代で、例えば中村さんもいずれリタイアされていきます。自治会もリタイアされていくので、それより若い人たちが役員を務めるようになります。まちづくり協議会も、若い人たちから高齢者までうまくピラミッドの形をしていけば、そういうかたちで世代が繰り上がってうまく循環していきます。

例えばこの条例のタウンミーティングでも、何でもそうなのですが、もちろん昼間は勤めに行っている若い人は来られません、土日にやっても来ません。集まるのはいつもお年寄りばかりということで、世代交代が進まないという悩みはどうなのでしょう。

○中村：1番の悩みの一つです。そういう居場所があって、より若い人たちが土日集まってくればいいのですが、南小はまだ地域共生ステーションがないものですから、その話し合いもして、進めているところです。今は僕の下に一応集まりますが、居場所がないというのが活動の弊害になると思っています。

後で話そうかと思ったのですが、地域をつくるために5年前からいろいろみんなと話合って、ようよう南の地域共生ステーションもできるようになりました。できるようになれば、そこにみんなが集まります。子どもたちも集まるし、共働きのお父さんお母さんも集まるだろうし、高齢者も集まります。そこでいろいろなことができるのではないかと思います。お茶を飲んだり、本の読み聞かせも、将棋を教えたりもできます。

その設計も済みました。そのようなかたちで、地域に根差した地域共生ステーションが、この5年話し合ってきた中で根付こうとしています。

居場所ですので、誰でも気楽に来られる場所として、いつでも開いています。鍵もかかっ

ていないところが地域共生ステーションだと思っています。

西小学校区には地域共生ステーションが既にできていますが、そこにはいろいろな人が参加してくれていますので、南小学校区でも地域共生ステーションをつくり、まちづくりも考えながら、継続して皆さんにやっていただくような土壌をつくっていきたいと思います。

今のところそういう場所がないので、高齢者だけでやっているという実情です。地域共生ステーションができれば、道が開けるかなと希望を持っています。

○大庭：今の中村さんの希望ですが、地域共生ステーションの先輩の葛谷さんから見て、果たして中村さんの理想、希望はかなうものなのでしょうか。どうですか。

○葛谷：私は、地域共生ステーションに週3、4日駐在して、まちの相談員ということで、皆さんと触れ合いさせていただいています。特に、午前中はお年寄りの健康体操とか、小さいお子さんをお持ちの方が遊びに来られますので、そこで会話が生まれています。お母さんたちも、市役所に直接言うことがなかなかできないので、「実は保育園で困っているんです」とか、「子育てが大変なんです」という普通の会話から、問題解決に導かれることが多々あるので、やはりそういった場は必要かなと思いました。

私は常々、お一人お一人に真剣に向き合うことが大事だと思います。ある方に、私に依頼すると「断らないから嫌いだ」と言われたのですが、私としては、言われたことは全部かなえたいと思って活動しています。腰を引いてまちづくりに臨んでいるわけではなく、真剣に皆さんと対話したいと思っているので、先ほどの大学生の方ではないですが、私のほうから出掛けていくことも、最近は多くなってきました。

そういったところで、一人一人とやっていけば、自然といいまちになるのではないかというのが、私個人の感想です。

○大庭：なるほど。ディスカッションの時間も半分を過ぎてしまったのですが、ここまでは、パネリストの皆さんが今やっという活動と、その周辺のことについて話し合ってきたわけです。重複するところも多々あると思いますが、今後、長久手市のまちづくりは、どうしていったらいいのでしょうか。どうしていきべきなのでしょう。

少し抽象的な課題かもしれませんが、これについて考えていきたいと思います。ひ

と言でまちづくりと言っても、非常に広い捉え方があると思います。先ほど小林先生から、これからのまちづくりにおいては、市民も重要な担い手であるということや、市民が自分たちでできることは自分たちでやっていこうという考え方を示していただいたと思います。

そこで、まず小林先生に伺いたいのですが、講演内容と重複するところが多々あるかと思いますが、自分たちでやっていくということは、言うはやすし行うは難しです。今の考えを、先生が一生懸命取り上げてくださいましたけれど、まち詩も、ある種理想論です。皆さんが活動の中での問題点を多々挙げてくださいました。先生自身も活動をなさっていらっしゃるが、長久手市の条例ができ、これから市民たちがやるべきこと、なすべきこと、何から始めたらいいのかが、一番分からないところです。

「条例ができたから何かやらないといかんのか」とか、「やれば何かもらえるのか」とか、そういうことになると思うのです。そういうところを、先生からお話しただけだと思います。

○小林：これは、なかなか難しい質問です。まず、何をしなければいけないのか。これは、そもそも、義務的に「これをしなくてははいけません」「皆さんこれをしなさい」という条例ではないと思います。

正直に言えば、条例ができたからといっても、何もする気がなければ、しなくて、しばらくぼうっとしていてもいい自由も、もちろんあると思います。でも、今はこの地域は暮らしやすいと思って暮らしていらっしゃるのだと思いますが、20年先30年先、自分の子どもや孫がこのまちでずっと暮らしていけるでしょうか。このまちを、暮らしやすいまちとして引き継いでいけるだろうか考えたときには、課題もないわけではないですよ。そこに思いを巡らしていただく、想像力を働かせていただくのが大事かなと思います。

たとえば、先日の岡山とか広島の水害を見て、香流川があふれるようなこともあり得るのかなとか、桁を越したような雨がどわっと降ったらゼロではないかもしれないとか、考えてみるといろいろありますよね。

あるいは、先ほど小林というやつがしゃべっていたけれど、そうか、新興住宅地はみんな若い子はいずれ独立して出て行ってしまうと、このまちも今は若くて元気だけれど、いずれじじばばタウンになってしまうのかなという心配も、地域によってはあるかもしれません。

だとすると、そのまま指をくわえていいのですか。そういうときに、自分でできる

ことは何かなど。私1人ではできないにしても、近所の仲良しの人と声を掛け合ったならば、こんなことくらいはできるのじゃないかなというところから、まずは始めてみてもいいのかなと思います。

実は、そうやってちょっと気にしてみると、先ほど言いましたように、インターネットとか、スマホとか、すごく発達しているので、少し探してみると、どこかしらで、既にそういうことをよその地区でやっている人がいたりします。あるいは、もしかすると長久手市内にも、「何だ、それをやっているのがまちづくり協議会の人たちだったんだ」ということで、活動がかぶるところがあるかもしれません。

だったら、私ができることはないかもしれないけれど、やれることはやらしてちょうだいよと言って、門をたたいてみるというのもあるかもしれません。

まずは考えて、情報を収集して、自分がやれそうなことが見つかったら、ちょっと思い切って飛び込んでみるということを、一人一人が考えていただくといいのかなと思います。

○大庭：なるほど。今の先生の言葉の中で、私として非常に重要だったのは、想像力です。先生が例に挙げておっしゃった水害でもそうですけれども、まさかというところが起きるような時代です。これは、災害ではなくても、自分たちの暮らしの中でもまさかと思うようなことが起きる時代です。かつては想像ができなかったことが起きる時代です。



あるいは、人口は読める数字ですから、そういうものを放置していて、想像力を働かせないという未必の故意みたいなこともあると思うのです。

そういうことで、市民一人一人ができることと、行政が携わること、議会が携わっていかなければならないことがあると思います。この条例の中でも、三つの三角関係、三つの大きなトライアングルがあって、市民がいて、行政がいて、議会があります。べつに市民だけがガリガリ頑張っていけばいい市になるわけでもありません。この三つの関係がいい緊張感を持ったトライアングルを形成することが重要であると、この条例もうたっているわけです。

もう一つお聞きしたいのは、行政とか議会との見合い、住民が思っていることとのずれを防ぐために、行政や議会とどういふふうに市民たちは向き合っていけばいいのでしょうか。

○小林：そもそも行政とか議会が住民とずれてしまうということは、あってはいけない、あってほしくないことです。

今日も、もしかしたら議員さんがおみえかもしれませんが、市民の皆さんからすると、自分の地区から出ている議員さんとか、人脈的に関係がある議員さんとかに、私はちょっと今こんなことで悩んでいるのですとか、これこそ想像力を働かせて先々問題になるのではないのかということ、相談していただくといいのではないかと思います。

議員さんも、地元の住民の皆さんに、何か困っていることないの？とか、あなたこんな活動しているけどうまくいっているの？とか、御用聞き的なことをしていただいてもいいのかなと思います。

そして、それぞれの地区なり、いろいろな組織関係、人間関係の中から、いろいろな課題が出てきたものを、議員さんが議会に持って行っていただいて、話し合いをしていただきます。議会って本当はそういう場です。

この条例だって、考えてみれば議会で作っていただいて、最終的に議決をしていただいた、決定していただいたので機能していくこととなります。議会が決めていただかなかつたら、市としては何も動けないところがあると思うので、まず、議員さんと市民の皆さんとが、もっともっと仲良くなっていくといいのかなと思います。

次に市はどうなのだ、役所はどうなのだということなのですが、役所の職員の皆さんは本来プロのはずです。いろいろな情報もお持ちだろうと思いますし、いろいろな仕組みをつくっていこうということにも長けているはずで。

議会の人たちからいろいろな話が出てきた。議員さんからいろいろな問題提起がされた。では、それを受けてどんな仕組みをつくれればいいのか。これは、役所の方が市民とも相談しながら、こういうふうになったら皆さんが解決しやすいということ、やっていただくといいのだろうと思います。

まさにおっしゃっていただいたトライアングルで、それぞれが自分だけで抱え込まずに、「こういうときにどうすればいいのだろう」とお互いに相談し合う。役所の人からしても、「皆さんはこれだったらうまくできるかな」「こちらのやり方のほうが都合がいいの？」ということ、働き掛けていただく。

そんなかたちで、お互いが敵ではなくて、立場は違うところもあるけれども、一緒にそれぞれまちのことを考えているということで、協力し合っただけでもいいのかなと思

います。

○大庭：ありがとうございました。今、小林先生がおっしゃったことについて、西島さん、それに関係したことや、直接関係したことではなくてもいいですし、自分の活動の中のことだけでなく、まちづくり全般のことで結構なので、自分のこと、やっていたらしゃる活動以外のことで、今自分が感じるものがあつたら、何かひと言いただけますか。

○西島：市とか議員さんということで、直接私に関わる機会はあまりないのですが、例えばお酒ネットという活動を、最初に紹介させていただきました。そこには、市役所の方が「来ちゃった」と言っていて、「ちょっとこれ、こうしたいけど、なかなかこういう場がないのです」と漏らしたり、市役所の方とプレゼンやまちづくり甲子園などにも出させていたたいて、自分の意見を表明させていただいています。

そういう場を設けていただくことも大事なのですけれど、自分たちで「こういう機会が欲しい」と市民のほうから言うことも大切なのかなと、私は思います。

○大庭：川島さん、いかがでしょうか。自分のやっていたらしゃるほかのことで、全般でも結構です。

○川島：皆さんのお話を聞かせていただきまして、一番の反省点は、私たちのグループは、市役所の方にお尻をたたかれながら毎月1回活動している状態です。取材した方の紹介も、市役所の方を通して取材している状態なので、誰を取材して、どういうことに興味があつて、何がしたいということ、一人ずつ自ら考えて活動しなければいけないと感じました。



○大庭：中村さん、いかがでしょうか。南から離れて、長久手市の全体を見渡したときに、今、先生のおっしゃったことで、お気付きの点がありますか。

○中村：今日は地域共生という言葉も入って、皆さんでやっというこつことなので、地域共生について、先生から少しお話をいただいたことを含めながら、自分で考えてきた

こともありますので、少しお話ししようかなと考えています。

まず、自分たちの地域のことは自分たちで決めて、決定していく、そういうまちづくりをしたいなど。地域力ということは何らかの文書で読んだことがあります。その地域力の温度差はたぶんあると思いますが、南小連合会では、地域共生というテーマで、今度の10月にもありますが、暮らしやすいまちにするために、皆さんが笑顔で暮らせるためにというテーマを持ちながら、みんなで話し合っていくことが、非常にいいのかなと思います。

そのために皆さんが共通する意見を出して、先ほど言われました少子高齢化、共働き社会にふさわしいコミュニティの形成ができれば、よりいいのかなと思います。

地域共生ステーションは、いろいろな人の意見が聞ける場だと思います。居場所、皆さんが来るところ、その役割も、皆さんで決めればできるのかなと思います。だから、役割と居場所のある地域の活動拠点ができて、そこで活動していきたいなど、今は考えています。

○大庭：ありがとうございました。葛谷さん、いかがでしょうか。

○葛谷：私は先ほども言いましたように、まちの相談員という名前なので、最近、とみに、いろいろな方からいろいろなご相談を受けます。

その中には、ご近所でのトラブルがありました。皆さんもご経験があると思うのですが、近所やお隣同士だからこそ解決できないこともあります。分かってしまうといけないので具体的には言えませんが、市に「何とかしてほしい」と言って、市はそちらの方にお手紙を出しました。それを受け取った人は、「なんでうちが」「誰が言ったんだ」ということになって余計悪くなってしまうと思うのですが、今回は、私と、社会福祉協議会の地区の方に入っていて、一緒に訪問させていただきました。

トラブルの原因になっているおうちに行って、いろいろなことをお話しさせていただきました。そうしたら、実は、その人もそのことについて、どうしたらいいのか分からなくて困っていました。だけど、近所の人には言われるから感情論で言ってしまっ、ちょっと関係がこじれていますというだけのことだったのです。

こちらが間に入って、いろいろ段取りをして、この間、そのことが解決されました。私を感じて良かったと思うのは、その後、ご近所のお二人が楽しそうにお話しされていたことです。

それはたった一つのことなのかもしれないのですが、まちづくりってそういうことかなと思いました。無理やり、隣同士は絶対に仲良くしないといけないと言われてしまうと、どうなのだととなりますけれど、そこにどなたかが入って、仲を循環させていくと、実はそんなに大したことではなかったというか、良かったなということになれば、その関係も戻ります。

昔、いいなと皆さんが言っている、向こう三軒両隣です。そういうのも復活するというか、息を吹き返すのではないかというのを、この間、感じたところです。

○大庭：分かりました。ありがとうございました。

もう時間になりましたが、今日は長久手市みんなでつくろうまち条例施行記念シンポジウムとして、ここまで「ここから踏み出そう！わたしたちのまちづくり」ということで、パネリストの皆さんと話し合っただけです。

最後に、小林先生、皆さんの意見を聞いて、短い時間ではありましたが、今後の長久手市のまちづくりについて期待を込めて、少しコメントをいただければと思います。

○小林：パネリストの皆さんのお話を伺っていて、熱い思いを持った市民の方が、この壇上に今いらっしゃるだけではなくて、たぶん氷山の一角という失礼になってしまうかもしれませんが、たくさん長久手市にはいらっしゃるのだろうなと、あらためて感じました。

いいじゃないですか。その思いをぶつけて、これからいろいろなことに取り組んでいただければいいなと思います。いろいろ活動をしていると、確かにいろいろと課題にもぶち当たりますし、悩みます。つらいこともあるでしょう。まだまだだな、私たち、と思うこともあるだろうし、どうやっていったらいいのだろうなと困ることもあります。

なぜ困るのだろうという、たぶん自分と人が違うからです。自分の思っていることと、隣の人が思っていることが一緒ではないということです。自分はこうしたいと思っっているのに、隣の人は全然それを感じてくれないのです。なんでおまえは気付かないんだよ、鈍いなと思って、いらいらします。そういうことなのです。

でも、先ほど講演の中でも申しましたが、要するに人と違う、いろいろな人がいる、多様な人がいます。むしろその多様な状況、違うという状況を楽しんでください。「うわ、なんだこいつ、変わっているな」「あれ？もしかして俺のほうが変わっているのかな」とか、「こいつ、毎日コンビニに行ったら変人だと思ったけれど、全然コンビニに行かない私のほ

うが変人かもしれない」と。

先ほどの話ですよね。そういう違いを楽しんでください。違うからぶつかって煩わしいのだと思うのですが、その煩わしさを、「これってすごく楽しい異文化交流しているな」「未知との遭遇だな」「未体験ゾーンに触れてしまったな」というふうにあドベンチャーだと思ったら、日々楽しく生きていけるじゃないですか。それくらいの心の余裕を持って、すぐに答えが出なくても仕方がないな、この人とあと3、4年も付き合えば、いずれ少しはお互いのことが分かるようになるのかなということです。

家族もそうではないですか。最初から完璧に全部のことが分かるわけではないけれど、いつの間にか古女房みたいなことになったりしているわけでしょう。そういうことで、じっくり長いことかけて、その違うというのを存分に楽しみながら、付き合っただけならば、20年後、30年後には、より一層幸せを感じられるような、すてきなまちになっていくのではないかなと今日感じました。

皆さん、今日はありがとうございました。

○大庭：先生、ありがとうございました。ご参加いただいたきましたパネリストの皆さん、ありがとうございました。短い時間で、議論は尽くされたとは到底思いませんが、この条例施行をきっかけに、私たち市民が、まちづくりに対して自分が何ができるか、何だろうかと少しでも考えてみるのが大切だと思います。

先生の先ほどの言葉でいうと、想像力をたくましくすることが肝心かなと思いました。このディスカッションはここで閉めたいと思います。ありがとうございました。

